

「塩田城、福沢諭吉と宮原清」その2

関口貞雄（48期、関西同窓会）

3 宮原清の生い立ちと慶応義塾入学

宮原清は明治15年（1882）12月、長野県小県郡田沢村（現青木村）田沢温泉の温泉宿の次男として生まれた。同年の4月に隣の殿戸村（現青木村）では五島（旧姓小林）慶太が生まれている。宮原は明治29年（1896）長野県中学上田支校へ入学した。

宮原の上田支校入学は五島の1年後になるが、五島は3年終了と共に松本本校へ転じたので、殆ど接点はなかったと推測される。

明治29年（1896）、松本本校から野球が導入され、上田支校に野球部が誕生した。

宮原は清水長之助と共に中心的な役割を果たした。

丁度この年、福沢諭吉が信州旅行にやって来て、長野市等で講演会が開催された。その動向が連日新聞紙上で報じられ、先祖のルーツのことも掲載された。この報道を読んだ宮原は幼少時から憧れていた福沢を身近に感じ、慶応義塾で学ぶ志望を抱いた。

明治33年（1900）、慶応義塾普通部5年に転入し、翌年慶応義塾へ入学することが出来た。入学と同時に明治25年（1892）創立の体育会野球部へ入部した。

4 第1回早慶野球戦

当時の野球界は第一高等学校の全盛時代で、内村祐之投手（内村鑑三の長男、後東大教授、精神医学の開拓者、初代プロ野球コミッショナー）を擁して無敵の強さを誇っていた。打倒一高の悲願から、早稲田から慶応に野球定期戦の申し入れがあり、明治36年（1903）11月21日第1回早慶野球戦が挙行された。

宮原は慶応入学と同時に上田中学野球部の後輩に声をかけ、慶応入学と野球部入部を勧めていた。従って試合当日の慶応ベンチには上田中学野球部出身者が4人いて、宮原は主将、二塁手で4番打者、桜井弥一郎(1期)が当日の投手、清水長之助と鷺沢与四二(1期)が控えていた。試合結果は接戦の末慶応が11-9で早稲田を下し、桜井は勝利投手として球史に名を残した。福沢諭吉は残念ながらその2年前に没しており、宮原がこの結果を報告することは叶わなかった。

東京六大学野球戦が発足したのは22年後の大正14年（1925）のことであった。

5 宮原清のその後

5-1 阪急沿線の住宅開発

宮原は明治38年（1905）慶応を卒業し、大阪の藤田組（土木、建築）へ入社し、土木工事、住宅地開発、住宅建築等を実地で学んだ。

明治43年（1910）、慶応の先輩小林一三の勧誘を受け、箕面有馬電気軌道（後の阪急電鉄）に重役として入社した。小林は大阪郊外の電鉄沿線の住宅地開発を開始しており、宮原は経験を生かして責任者に任命され、豊中、池田、川西、宝塚、西宮、神戸と次々と住宅地を完成させた。

しかし初期には苦闘の連続で、小林の意向でモダンな本格的郊外住宅を目指したので、一区画が100坪（330平方メートル）とした。小林のアイデアで割賦販売を行ったが、容易には買い手がつかなかった。

そこで宮原は川西市の新開発地に率先して10区画（約1,000坪）を買い入れ、自宅を建てて誘い水とした。豪壮な門構えの邸宅で、昭和38年（1963）宮原が没した後もご家族は住んでおられた。私が昭和50年（1975）に川西市へ転居してきたときに宮原

の表札を見た記憶がある。今年5月私は邸宅跡地を再度訪れたが、正門は既に撤去され、周囲の垣根と勝手口だけが残り、かつての母屋は既に取り壊されていた。



小林 一三



宮原 清

5-2 神島化学工業（株）創立

大正6年（1917）宮原は肥料を製造する神島化学工業（株）を設立して社長に就任した。肥料の需要増大に対処するため国産化を進める国の方針にも合致し、業績を伸ばすことが出来た。設立に当たっては小林一三の助言と支援があったと推測される。大阪府八尾市に主力工場があり、戦後も順調に成長して好業績を維持したが、肥料業界の需要減退と構造変化に対応するために同社は2分割され、一方は肥料会社に（のちに三菱商事肥料部門に統合）、もう一方は建材会社として住宅用建材、化成品、セラミック等を生産し、現在も東証二部に上場されている。

5-3 野球とのかかわり

（1）夏の甲子園高校野球大会

小林一三は宝塚少女歌劇団を立ち上げて後、人気の出てきた学生野球に注目し、大正4年（1915）8月朝日新聞社に呼び掛け、阪急沿線の豊中運動場で第1回全国中等学校野球大会が開催された。現在の夏の甲子園全国高校野球大会の原形である。野球に無縁だった小林の相談相手、助言者は宮原であった。

しかし豊中運動場は狭く、第3回大会からは阪神電鉄沿線の鳴尾球場、更に第10回大会からは甲子園球場で開催され、後援者は阪急電鉄から阪神電鉄に移行した。

後年小林がプロ野球の経営に興味を抱き、阪急ブレーブス球団を設立したが、その時に相談相手となったのが河野安通志で、第1回早慶戦の早稲田の投手であった。

河野は早大野球部監督を長年務め、アメリカのプロ野球の事情に明るかった。この様な情報を宮原は小林に提供したと思われる。

因みに小林も河野も後に野球殿堂入りを果たしている。

（2）春の選抜高校野球大会

朝日新聞社のライバル毎日新聞社は春に選抜方式で中等学校野球大会を計画し、第1回大会が大正13年（1924）4月、名古屋の山本球場で開催された。この時毎日新聞社の相談役となったのが宮原で、大会の運営は前年秋に行われた地方大会の実績を基にした選抜方式を採用し、宮原はその選考委員長を務めた。

第2回以降は夏の大会と同じ甲子園で開催された。

(3) 社会人野球大会（都市対抗野球大会）

宮原は社会人野球の普及に私財を投じて努め、毎日新聞社に声をかけ、毎日新聞社が主催して昭和2年（1927）第1回大会が東京の神宮球場で開催された。

昭和24年（1949）日本社会人野球協会が設立されると、宮原は会長に就任した。後年アジア野球連盟の設立にも努力し、推されて会長を務めた。

(4) 野球殿堂入り

昭和38年（1963）宮原が没すると、長年の日本アマチュア野球界の発展に貢献した功績が評価され、翌年野球殿堂入りが決定した。早慶戦の勝利投手桜井は慶応野球部の監督を務め、昭和33年（1958）に74歳で死去。後進の指導と野球の発展に大きな功績があったとして、昭和35年（1960）に一足先に野球殿堂入りを果たした。

5-4 逸翁美術館理事長、藤田美術館長就任

宮原は晩年に文化活動も熱心に行っている。お世話になった藤田組、阪急電鉄と小林に対する報恩の気持ちからの行動であった。

慶応卒業後、最初に就職した藤田組のためには執事長を引き受け、更に藤田家に伝わる国宝の陶器数点等を展示する藤田美術館の館長に就任した。

一方、阪急電鉄が池田市の小林一三別邸に記念館「逸翁美術館」を設立すると、理事長に就任して積極的に協力した。小林が生前に蒐集した茶器、陶器、書画等約5,500点の他、宝塚歌劇関係の資料も展示している。開館50周年を期に他の場所に新装開館したので、別邸は「小林一三記念館」として別に開館した。

野球一筋で文化活動に無関心、無縁だった宮原が晩年になってこの様な文化活動に熱心になったのには理由がある。若き日、小林に招かれて入社し、電鉄沿線の住宅開発に従事した時、豊中市一池田市-川西市を結ぶ丘陵地帯には多数の古墳が点在していた。古代の渡来民秦氏、東漢氏がこの一帯に住み、養蚕を盛んにして大和朝廷の財政を支えた。これ等の古代渡来民の古墳が数多く残されていたが、住宅開発の時、その古墳群を容赦なく掘り起こして住宅地に変えた。ある学者は「小林一三は新しい文化の創造者ではあるが、古い文化の破壊者である」と評している。

小林の指示で実行したとはいえ、宮原は心が痛んだものと推測される。これが晩年の文化活動につながったものと思われる。



小林一三別宅門（小林一三記念館）

旧逸翁美術館（記念館）

新逸翁美術館

6 おわりに

最初に想定した上田市の塩田城址と川西市の宮原清邸跡地を結ぶ線が引かれたのは、明治29年（1876）の福沢諭吉の信州旅行が引き金となったことが明らかになった。

上田高校の大先輩宮原清と桜井弥一郎の二人が創世記の日本野球界に貢献した功績で野球殿堂入りしたことは大変名誉なことで、全国の高校でも他に類がないことである。

明治文明開化の立役者、福沢諭吉のルーツが上田市にあったことは意外に知られていない。上田市は真田氏と上田城ばかりではなく、福沢氏と塩田城も誇りに思っていることである。 （2018年9月記）

以上

（編集部より）

宮原清と桜井弥一郎については、関東同窓会会報 91 号（2016 年 1 月刊）の「うえだ ゆかりの偉人」シリーズで、丸山清光さん（70 期）が執筆しています。

こちらも合わせてお読みください。